2008年（平成20年）
第10号
（10月5日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

庭野開祖の生誕、そして入寂の日

１０月、１１月の２ヶ月は、本会会員にとって、１年のうちで最も重要な月になります。１０月４日に、庭野開祖は入寂しました。１１月１５日は、開祖の生誕会にあたります。

この２つの行事を通じて、庭野開祖の遺徳を全会員でかみしめるとともに、報恩感謝の意をこめて新たな誓願を立てる月として取り組んでいます。

庭野日敬開祖は、１９０６（明治３９）年、１１月１５日、新潟県中魚沼郡十日町大字菅沼（現 新潟県十日町市菅沼）に生まれました。

１６歳の夏、父・重吉から「なるべく暇がなくて、給料の安い、骨の折れるところへ奉公するように」との教えを受け、上京。その後、恩師である新井助信師や長沼政（のちの脇祖長沼妙佼）との出会いを経て、１９３８（昭和１３）年、立正佼成会を創立しました。

「法華経によって、すべての人を救いたい」との願いのもと人々の幸せを願って、法華経の研鑽、会員の教化・育成に努めました。

また「真の平和は宗教心の涵養による以外にない」との信念から、「国民皆信仰」「明るい社会づくり運動」を提唱するとともに、世界の平和境建設をめざして、宗教者同志が手を携える必要性を訴え、国内外で積極的に宗教協力活動を展開。１９７０（昭和４５）年にＷＣＲＰ（世界宗教者平和会議）やＡＣＲＰ（アジア宗教者平和会議）の創設・運営に力を尽くしました。

１９７９（昭和５４）年には「宗教界のノーベル賞」といわれるテンプルトン賞を受賞。１９９１（平成３）年１１月１５日に「法燈継承式」を挙行し、長男・日鑛に会長位を委譲しました。

その後も、世界の平和を目指して精力的な活動を続けましたが、１９９９年（平成１１）年１０月４日、９２歳で入寂しました。

拝み合い、認め合い、分かち合い、協力し合う。これは、法華経を貫く一乗の精神。庭野開祖のこの教えを学び、継承し、現実社会の中で実現していくことを、会員はあらためて誓い合います。

一食を捧げる運動

○　毛布の第１便が間もなくアフリカへ到着

「アフリカへ毛布をおくる運動」で集められた毛布の第１便が、８月２８日、ジブチに向けて出発。間もなく現地に到着します。１０月１日には第２、３弾がモザンビークに向けて出向し、１２月までにアフリカ各国に毛布が届けられます。

○　今年度毛布枚数９万４７０６枚

アフリカ各国に配布される毛布は９万枚。残りの毛布は自然災害などに対する備蓄用として保管されます。なお、毛布と併せてご協力いただいた海外輸送協力金は約６０００万円に上っています。

○　毛布配布国／協力団体／枚数は下記のとおり

・エチオピア／ディグレ救援協会／２万３５２０枚
・マラウィ　／マラウィ赤十字社／１万５１２０枚
・ウガンダ　／ｱﾌﾘｶ開発緊急機構／２万　１６０枚
・ソマリア　／ＡＤＥＯ　　／　３３６０枚
・ｽｰﾀﾞﾝ南部／ＡＤＥＯ　　／　３３６０枚
・ジブチ　　／アムダ　　／　５０００枚
・ﾓｻﾞﾝﾋﾞｰｸ　／共同体開発ｷﾘｽﾄ協会／　８４００枚
・ﾓｻﾞﾝﾋﾞｰｸ　／クリマ　　／１万０００枚

皆さんのご協力ありがとうございました。

時事刻々

オリックス清原和博内野手が一日、多くの仲間、ファンに見送られ、在籍した西武、巨人、オリックスへの感謝の言葉を述べ、プロ野球人生を終えた。最後の打席、ピッチャー杉内の直球にフルスイングして、空振り三振。対戦した十八球全部真っすぐ勝負を挑んでくれた杉内も素晴らしい。ストライクは１球も見逃さずにフルスイングで応えた清原も圧巻だ。

これまで故障との闘いの連続だった。何回も二軍に落ちた。戦力外通告も受けた。しかし、そのたびに強靭な精神をもって、復活に向けてトレーニングを積んだ。そして、何度も這い上がってきた。その陰には亜季夫人の検診的な支えがあったことも忘れられない。

清原選手のことを「記録より記憶に残る男」と多くの人が語る。限界を超えるまで戦い、懸命に努力して、すべての力を出し尽くした。そこに、みんなの惹かれるものがある。

諸宗教対話のコーナー

宗教協力

新日本宗教団体連合会に青年会があります。この青年会は各地区において様々な行事を行っており、各宗教の枠を超えてこられた諸先生・諸先輩方に倣い若い力で盛り上げていくものです。先日私はその青年会の近畿地区の、青近連の教団交流会に参加してまいりましたので報告をさせて頂きます。今回参加の教団は、円応教・パーフェクトリバティー教団（ＰＬ）・大慧会教団・立正佼成会の４教団です。

先ず、立正佼成会の酒井参務（元理事長で現佼成学園理事長）の講演があり、宗教青年の役割を教えていただいた。学園の生徒とのふれ合いの中で特に心がけていることとして、①挨拶の実践②食前・食後の感謝の実践③校門で一礼の実践④整理整頓⑤思いやりの実践。以上の五つの心がけを通して、宗教心を育んでいくとを大切にしておられます。宗教の違いを超えて大切にしたい実践です。そして宗教は命の尊さを知ることが大切であるとも教ええ頂きました。自身の命の尊さに目覚め、他の命を大切に出来できる心を作っていく、日本国民全てがこのように宗教心を養い思いやりのあふれる日本にするために我々宗教青年が成すべきことはやはり布教にほかなりません。職場や学校、地域・社会で触れ合う全ての人に五つの実践を自ら率先しいい縁に成れたらと思います。その後グループミーティングを行い、懇親会が有ったのですが次回に詳しく書かせて頂きます。庭野開祖の思いに少しだけ近づけた時間でした。

明るい社会づくり運動

伏見明社　七瀬川清掃活動

全国明社活動が見直されて２００７年度から新体制に移行することとなり、地区を主体とした草の根活動を活性化することとなりました。

伏見明社としてはしばらく休止状態にありましたが、ボランティア活動の原点に立ち返って地区の清掃から再スタートすることとしました。

伏見区の中心部を流れている一級河川「七瀬川」を、京都市が都市美化のモデルとして「二層式河川構造」とした改修事業を行ないました。我々住民としてはこの環境維持に少しでもお役に立てればと思い、２００７年４月から毎月１回「この指とまれ」の精神で清掃活動を始めました。今年の９月で１３回実施してきましたが、最近は近在住民の方も関心を示され、清掃を実施されるようになって来ました。

現在は写真のように「せせらぎ」が流れて、散策と憩いの場として住民に親しまれています。

京都市並びに伏見区の関係部署とも連携してこの活動を続けて行きたいと思っています。

伏見明るい社会づくり運動　事務局長　杉江永至

佼成会ミニ知識

お戒名

「戒名」の本来の意味は、仏さまの教えを受けた人が、その教えを堅く守っていくという意味合いで頂く“法名”なのですが、本会の場合は故人に対して授与する名号として「戒名」と言っています。

入会者は家族や親族、知人、友人など、わかる範囲の亡くなった人の氏名を没年、性別、大人か子供かを本会規定の用紙に書いて、教会戒名室に提出します。亡くなった人の氏名や没年がわからない場合は、○○さんの祖父とか祖母、叔父、叔母という形でもいいのです。なぜ本会が「戒名」を出すことを強調するのかといえば、本会で授与する戒名は入会者に関係のある故人の成仏を願って、最高の数である九文字の戒名を頂けるからです。いってみれば、本会では故人が平等に成仏することを第一に考えて、戒名を授与させて頂くのです。それは、先祖供養のとき最も身近な先祖に最大の感謝を表すことです。

仏教を生活に生かす　「日常生活の中の仏さまの教え」

今回から新コーナー「仏教を生活に生かす」が始まります。お釈迦様が説かれた教えを日常生活に活用し、ものごとの受け止め方や考え方を、仏教真理に照らして毎日を過ごせたら、どんなに幸せな事でしょう。

そんな願いを込めて、学問としての仏教ではなく、**「生活仏教」**になるように学んでいけたらと思います。

《仏が仏になる教え》

一般に仏教は、凡夫(普通の人間)が仏になるための教えであるとの理解が多いかと思われます。しかし、大乗仏教においては、人間のみならず生きとし生けるものすべてが仏性(仏と同じ性質)という本源のいのちの現われであり、凡夫と仏という**相対の世界を超えた絶対の仏の世界**が説かれてあります。つまり、**「仏が仏になる教え」**であります。

私たちの肉体は六十兆もの細胞が有機的に関連し合い、いのちを存続させています。それはやがて老いて病み、そして、だれも皆、必ず死を迎えます。この肉体のはたらき・現象そのものからして、「縁起」と「無常」の真理を具体的に表しています。すなわち、**すべてのものごとは、関係(縁起)しながら変化(無常)している**のです。

ですから、私たちのいのちとは真理・法そのものであり、仏のいのちそのものであるといえます。本来、皆、余ることなく欠くることなく、すなわち過不足なく、本源のいのちのはたらき・作用が円満に備わっているのです。

凡夫だからまだ足りないとか、特別に修行しなければ仏になれないのではなく、ただ**思いやり(仏心)を発揮する**ことが大切なのです。これに気づくことがつまり、「仏性開顕」(ぶっしょうかいけん)です。そうして**お互いが共に合掌礼拝し、賛嘆し合う世界**こそが「法華経」の一仏乗(いちぶつじょう＝大乗・小乗の区別を超越した世界)なのです。

《光を見いだす》

今から二千五百年前の北インド、十二月八日の朝のことです。明けの明星がキラキラと輝くさわやかな時、菩薩のみ心にひらめくように悟りが開けました。すなわち、すべてのものを見る目が一変したのです。

表面の現象を見るのでなく、万物のほんとうのすがた、すなわち実相をありありと見通されるようになったのです。つまり**仏知見(ぶっちけん＝仏の智慧)**を得られたのです。

その時、次のように仰せられたといいます。「奇なるかな。奇なるかな。一切衆生ことごとくみな、如来の智慧・徳相を具有す。ただ妄想・執着あるをもっての故に証得せず」

前半の意味は、「不思議だ。不思議だ。一切衆生はみな、仏と同じ智慧と徳のすがたをそなえている」ということになります。すなわち、仏の眼によって世界をご覧になると、何もかもが一変してしまったのです。

人間はもとより、あらゆる動物も、植物も、みんな**仏と同じように尊い、光り輝く存在に見えてきた**のです。不思議だ・・・と釈尊はおもわずつぶやかれたのでしょうが、それは怪しむ意味の「不思議だ」ではなく、すべての存在の実相を見極められた大いなる喜びに満ちた「不思議だ」だったに違いありません。

悟りを開かれ、仏となられた瞬間、釈尊の眼には、あらゆるものが光り輝く存在に見えたということ、それは**「仏になる」**とは**「あらゆるものが、光っているように見える」**ということではないでしょうか。

つまり、人や出合いのなかに、光り輝くものを見つけ出す、**本来光っているものを、光っていると見ることのできる眼をもつ**こと、それが仏になるということではないでしょうか。

そういう眼で世の中を見ると、どんな世界が見えてくるのでしょうか。それは、**すべてが尊く、だれもが仏さまに見え**、どんなことに出合ってもひるまず、必ず自分を生かす道だと信じ、安心して生きられる世界です。

仏の教えによって、心がつねに法悦(ほうえつ＝法による喜び)に満たされておれば、この現実の世界が、楽しくて楽しくてならないところに一変するのです。**どこを見ても美しく、誰を見ても菩薩に見える**のです。

本質においては金色に光り輝くような美しい世界なのに、心のレンズにいっぱい汚れがついているために、それを通してみる世界が汚れてみえるだけのことです。

ですから、心の汚れをすっかり拭いさってしまえば、この世はこのままで寂光土にかわるのであって、**法華経の教えの真髄はこのところにある**といってもいいでしょう。釈尊は永いご修行の末に、ついにその**「真実」**を悟られたのでした。　(つづく)

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《奇跡》

昭和四十五年十月十六日。京都の宝ヶ池のほとりに建つ国立京都国際会館に、世界三十九ヶ国から三百人を超える宗教者が集まった。この日をめざして営々と積み上げられてきた努力の結実である第一回世界宗教者会議(WCRPⅠ)の開幕の日であった。

仏教、キリスト教、神道、ヒンズー教、イスラム教、ユダヤ教、シーク教、ジャイナ教、儒教、ゾロアスター教など、世界の主要宗教の指導者が続々と会場につめかけてくる。アメリカ、イギリス、フランス、スイス、オランダ、西ドイツなどの自由主義諸国からの宗教者。ソ連、西ドイツ、ポーランド、ルーマニア、ブルガリア、モンゴルなどの共産圏諸国の宗教者。インド、パキスタン、インドネシア、ケニア、エチオピア,ウルグアイ、ブラジルなどの発展途上国の宗教者。当時、紛争のさなかにあって世界の注目の焦点になっていた南ベトナム、そしてイスラエルの宗教者‥‥。

「世界の平和実現のため」という共通の願いのもとに、世界中の宗教を網羅した宗教代表が国境を超え、宗派の違いを超えて一堂に会したのだった。第一回世界会議は、私たちが当初思い描いたよりも、はるかに充実した内容と、全世界的な広がりをもった会議として実現したのである。

日本の宗教者はもちろんのこと、海外から参加した宗教者たちにとっても、想像をはるかに超える規模であったにちがいない。ローマ教皇パウロ六世、ウ・タント国連事務総長をはじめ、ノーベル平和賞受賞者のレスター・ピアソン前カナダ首相ほか多くの世界的指導者からのメッセージが寄せられた。宗教者だけでなく世界の目がこの会議にそそがれていたといってもいいだろう。

京都会議を「世界宗教者平和会議」の名にふさわしいものにするために、実行委員会は参加者をそれぞれの信徒数を考慮して代表者数を定め、そして、その宗派、教団に大きな影響力をもつ指導者であること。アジア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカの全地域を網羅し、出来る限り多くの国の宗教者に参加してもらうこと。また、その宗教者に加え、討議する問題についての専門家のコンサルタントにもオブザーバーとして出席してもらう。

この基準に基づいた呼びかけによって、会議に参加した代表は、アジアから十五ヶ国、百三十二人の代表。北米大陸からはアメリカ、カナダの三十七人、そして南アメリカのウルグアイ、アルゼンチン、ブラジルから五人、ヨーロッパからは十三ヶ国、三十五人の代表、アフリカからはケニア、南アフリカ、エチオピア、リベリア、セネガルの八人、そしてオーストラリアから二人の代表がそろった。

中国と北ベトナムに対しても、会議の直前まで参加の呼びかけをつづけたのだが、両国の代表の姿はついに見られなかった。しかし、それぞれの国を代表して参加したその参加国の人口をあわせると、地球の人口の 70%に達する、文字通り世界の宗教代表がつどう人類史上初めてと言っていい会議になったのであった。

ブラジルから参加したヘルダー・カマラ大司教は**「いま私たちがここに集まっている事実は、主がなしとげたもう奇跡である」**とまで言われた。それぞれの宗教の正装をまとった宗教者で埋め尽くされた大会議場に、高らかに鐘の音が響きわたった。第一回世界会議は、岸信宏氏(浄土宗官長)を導師とする仏教の祈りで開幕した。

《平和に取り組む宗教者》

開催国の代表として会議の名誉総裁を務める大谷光照師(浄土宗本願寺派門主)がまず登壇された。

「日本は世界で最初に原子爆弾の被害を受けた国です。そしてもう一つ、日本は攻撃的戦力を否定した平和憲法を持つ国であります。この二つのことから、日本はこの意義深い会議をひらくにふさわしい国だと私は確信いたします。科学は、平和にも破滅にも寄与します。しかし、**科学がいかに発達し進歩しても、科学自体が平和を決意することはありません。世界に平和をもたらす道を発見するのは、私たち人間自身しかありません。**

平和の実現は、私たちの決意と努力にかかっております。この会議の真の成果は、この会議のあと、世界の宗教者が平和実現のためにどのような行動をとっていくかにかかっていると言えましょう」と開会のご挨拶をして下さったのである。

のちに**「人類の奇跡」**といわれる歴史的な会議が、ついにその幕を開けたのであった。　(つづく)

渉外部からのメッセージ

先月もお便りを頂いていながら、ここでご報告とお礼を申し上げていませんでした。申し訳ありません。参議院議員の藤末健三さんから頂きました。釈尊のお言葉がユネスコ憲章にも通じると教えて頂きましたとお便りにありましたが、逆にこちらが教えて頂きました。今更の事ですが約２５００年前の釈尊の言葉が現代にも通用することで釈尊の偉大さ、真理はどの時代でも同じということを改めて教わった思いです。この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK 京都教会　FAX 075-762-2266